サウーデ教会女性部会報

２０１６年　４月　　Nº　２８４

もくじ

		ページ
●巻頭言 「ここに愛がある」	丹羽美香師	②
●あかし	原田泰子	④
	吉加江紀子	⑤
	鈴木弘子	⑥
●みことばの小箱	石田喜子・松井明子	⑧
	畠中美恵子	⑨
●集会案内		⑨
●キリストかおる童謡 「赤とんぼ」	長谷川美代枝	⑩
●個人消息／お知らせ		⑪
●編集後記		⑫

巻頭言

丹羽　美香　師

「ここに愛がある」

ヨハネ第一　４章７～１０節

［1］私たちはお互いにみな愛を求めています。若い男女の愛、夫婦の愛、親子の愛、お年寄りが孫に求めていく愛もあります。その他いろいろ・・・。人間が人間同士で愛し合っていく愛というものは、本当の頼るべき愛ではありません。人は「私は心からあなたの愛、また、ご親切を頼りにしています」と言います。また「あの人（あの子）が私を愛してくれ、よく気を付けてくれているから」とか、「あの人、あの子さえいてくれたら」とか思いやすいのです。

［2］聖書の示す愛は「ここにある」　１０節

しかし聖書は、あなたが頼るべき愛、いつまでも渇くことなく泉となるべき愛は、そういう人間の愛ではありません、と語っています。聖書は、そんなところに愛があるのではなく「愛はここにある」と語っています。すなわち「イエス・キリストにおいて神が私たちを愛してくださった」というところに「本当の愛がある」と言っているのです。

結婚式の時は、男女が一番愛し合っている時でありましょう。もう他のものは目に入らないほど愛し合っているように見受けられます。しかし、その愛でさえ本当の愛ではないのです。いつしか色あせて

いくものなのです。何年か前のＮＨＫの川柳で「妻の声／初めドキドキ／今どうき」というのが紹介されました。いみじくもよく表わされているなと感じました。

［3］本当の愛を求めていこう

「私を愛してくださるイエス・キリストにこそ本当の愛があるのだ」ということを見極め、そして、そこで愛された者がお互いに愛し合っていくところに、私たちの愛の世界があり、愛が広まっていくのではないでしょうか。そうでなければ、私たちは絶えずその愛を他のもの、他のところに求めて失望したり、落胆したりします。

聖書は、「ここに愛がある。イエス・キリストの処に」と言っているのですから、「その処に私たちの求めるべき、生きるべき、立つべき愛がある」ということを心に留め、覚えていきたいと思います。そして、そこで養われ、そこできよめられ、そこで立ち上がらされて、私たちが送る日常の生活が強く進められて行きたいと願わされます。

最後に、新聖歌の２０５番の一節、

睦まじき仲も　主いまさずば
破れ棄つること　なしとはせず

とあります。私たちお互いの愛も主を中心とした交わりでありたいものです。

あかし

主の恵み

原田　泰子

以前、美香先生からいただいた本に「家族が一緒にいることは主の恵みだ」という一節がありました。読んだとき、「クリスチャンだった父が家族皆をまとめてくれていたんだな」と改めて思わされました。

私は幼いとき、アマゾンで親族５家族と一緒に住んでいました。多いときで３０人ほどいましたが、まったく争い事はなく、ただ楽しかったという思い出ばかりです。私が１８歳の時、姉と兄とでサンパウロへ出て洗濯屋を始めました。アマゾンにいる兄弟たちは教育の為にと、中学に上がる子供たちを私たちの元へ寄越しました。すでに大勢で暮らすことが当たり前になっていたので彼らの世話や家事なども何ら苦労は感じませんでした。

父は、「家族の一大事に助け合えるから」といつでも家族が一緒にいることを考えていたようです。父は青年時代、英語が習いたくてアメリカ人家族の元へ入りました。牧師だったご主人に付いて礼拝に行くうち「本当の神様だ」と知り、クリスチャンとなりました。その後は、のちの同志社大学で学んでから、朝鮮へ渡り家族を持ちました。しかし、ますます戦況が激しくなってきたとき、父は「戦争で子供たちの命を無駄に取られたくない」と、アマゾンの奥地へ行くことを決断したといいます。その判断は正しかったと心から感謝し尊敬しています。しかし、アマゾンでの苦労は言葉にはならなかったことでしょう。そんな中でも子供たちには、細かいことにも

注意を払い、厳しく、事あるごとに神さまのことを話し聞かせてくれました。幼心に覚えていますが、父はいつも朝早く起きてランプの明かりの下で何かを読み、書いていました。それは聖書だったと後で知りました。デボーションの難しさを感じている私にとって、思い出す度、反省させられます。私が今こうして曲がりなりにもクリスチャンと呼ばれるようになったのも、そんな父の教えのお蔭です。家族からだけではなく、多くの方からも慕われ頼られたという父の存在とその決断は、神様を通してさらに大きな恵みを、今も私たち家族にもたらしてくれているのだと思いました。

世界祈祷日に参加して

吉加江　紀子

3月4日(金)、連盟女性部主催の世界祈祷日に、サウーデ教会日語部から3名の姉妹(菅原ミヨノ姉、蛸井恵子姉、そしてポ語部から菅原アリセ姉)と共に参加させていただきました。連盟女性部の役員でもあるアリセ姉には、初めての参加だけに予備知識のない私にとってご一緒していただき、とても有意義な日を過ごさせていただき感謝でした。

世界祈祷日は、1877年にアメリカの女性たちによる移住者、そして抑圧されている人々の為の平和を求めた祈りが、教派をのり越えて広がりました。現在では、世界祈祷日国際委員会(WDP)が中心となって、世界中で毎年3月の第1金曜日を世界祈祷日として定め、その年のテーマに沿って祈りあい、キリストの愛を各国に広めています。

今年2016年は、キューバからのメッセージとして「子供を受け入れなさい。そして私も」というテーマでした。「キリストにあっては個々の違いはあっても一体であること。神の国は子供たちのものである」を柱に、ことに各国の女性信者、ならびに子供たちと連帯し、子供たちに耳をかたむけ心を一つにして祈りあうというもので、世界各地で同じ式文を用いて礼拝を行いました。

会場はピネイロス聖ヨハネ教会でした。各教団から出席された兄弟姉妹と知り合いになり、深くお話を伺い恵まれました。また美味しいお茶とおやつをいただいて戻りました。私は他教会への礼拝に出席したことがないので、今回の礼拝は色々な意味でたくさん勉強になり、神様に深い恵みをいただき感謝の一日でした。

目に見えない罪

鈴木　弘子

私は毎週水曜に行われている聖研祈祷会へ参加しています。そこでの丹羽先生の「罪について」のメッセージ、「罪には目に見えるものと、見えないものとがある。見える罪は誰が見ても分かるような殺人や泥棒です。でも人は皆、心の中に罪を持っていて、それは自分にしか分からない憎しみや嫉妬などです」とのお話しに、すごく私にはその見えない罪が、胸の中につまっていると感じました。

私には長年、執念深く思っていることがありま

した。それを姉の前で口にすると、「そんなことは忘れなさいよ。そうでないと前には進めないわよ」と言われます。でも、悔しい気持ちが強くあり、「絶対に忘れることは出来ない」などと相手を憎む気持ちさえありました。しかし、そうじゃないんだと先生のお話しでよく分かり、本当に恥ずかしい気持ちになりました。

もし、信仰の道に入っていなければ、心の中の罪など一生分からなかったことでしょう。御言葉のお蔭で、これまで心の中で犯し続けていた罪をずっと抱えていたことを知り、胸がいっぱいになりました。それから、少しずつでもイエス様に取り去ってもらえるよう毎日祈っています。そして、心の罪を感じるようになって、初めて他人のために祈ろうと考えるようになりました。例えば、お電話で体調が優れないと聞けば、「お大事に」という言葉だけでなく、電話を切った後すぐにイエス様に祈らせていただいています。そうやって、なんとなくですが自分なりに見えてきたものや、感じるようになってきました。

聖研祈祷会では、皆さんが元気に集えたことに感謝されながら、輪になって証しし合い、祈り合います。その帰りはとても気持ちが楽になり、心身共にすっきりします。これからも礼拝同様に喜んで出席させていただきたいと思っています。

みことばの小箱

年初めにいただいた御言葉は何でしたか？

石田喜子姉　　哀歌　3章32節

たとえ悩みを受けても、
主はその豊かな恵みによって
あわれんでくださる

※90歳を過ぎれば、当然、痛いところも弱いところも出てきます。でも、朝晩祈り、御言葉を読み、賛美を歌っていると気持ちが生き生きしてきます。礼拝や聖研祈祷会の度、「今日は行くことができるかしら？」と自分の身体が気にかかりますが、時間がくると心も身体も軽くなり、なんとか出席を続けさせていただいています。これも神様の恵みだと感謝しています。

松井明子姉　　ローマ　12章17節

だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、
すべての人が良いと思うことを図りなさい。

※日々の暮らしも不自由なく幸せに過ごさせていただいているのに、つい感謝を忘れ、いきり立ってしまうことがあります。こちらが良いことと思っていても、相手には悪く取られることもあり、心が騒いでしまうのです。そうやってモタモタしている間に悪魔が働いて、「御言葉をいただいているのに」と反省ばかりしています。ますます主にお委ねしていく他ないと祈らされています。

畠中美恵子姉　テモテ第一　6章17節

わたしたちにすべてのものを豊かに与えて
楽しませてくださる神に望みを置くように。

※いつも思うのですが、生活の中で問題があっても、不思議と自分の望む通りになることが多く、恵まれていることを実感しています。私は日々、神様に「お願い」と言って問題を丸投げし、一切をお任せしています。そのようにして自分は行動しないのに、気が付いたら良い方向に向かっています。同居する実母とも「不思議ね。神様は素晴らしいね」とよく話しています。ですから、この御言葉をいただいたとき、とても有難いく思いました。

集会案内

本年度4月より、新たに出山兄姉宅にて集会が始まりました。兄姉は共に長らく闘病生活を続けておられます。そんな中にあっても、熱心に自宅で礼拝のDVDやテープを聞くなどして、信仰生活を守ってこられました。しかしこの度、「直接、御言葉が聞きたい。さらにはご近所の方にもその御言葉を宣べ伝えたい」との申し出により、集会をもたれることになり、美香師がそのご用に当たられています。初回は9名が参加され、うちお一人はご近所の方でした。今後はさらに新しい方々も加わってくださる予定です。

◎　毎月第2木曜日　午後2時より

キリストかおる童謡

『赤とんぼ』

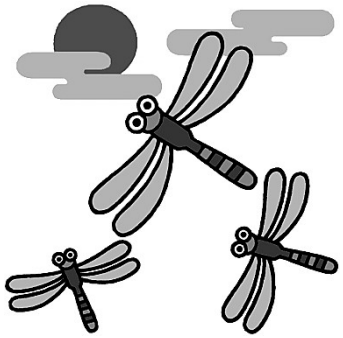
作詞／三木露風
作曲／山田耕作

一、夕焼小焼の　赤とんぼ
負われて見たのは　いつの日か

二、山の畑の　桑の実を
小籠に摘んだは　まぼろしか

三、十五で姐やは　嫁に行き
お里のたよりも　絶えはてた

四、夕焼小焼の　赤とんぼ
とまっているよ　竿の先



「赤とんぼ」は国民的愛唱歌です。

作詞家の三木露風は、ある時、窓の外の赤とんぼを見て、幼い自分を背負った子守の「姐や」を思い出したそうです。彼は31歳の時に北海道のトラピスト修道院に国語の教師として赴任しました。露風は「赤とんぼ」を発表する前の年のイースターに、夫人とともに洗礼を受けました。4番の歌詞の「とまっているよ竿の先」という言葉の奥に、信仰者として心の定まりを感じ取ることが出来ます。竿の先に止まったとんぼの姿を十字架に重ねた露風。主にあっての安らぎを得た喜びを歌っています。

作曲家の山田耕作は、日本はもとより世界にも名を知られた

作曲家です。医師でキリスト教伝道者だった父の下に生まれ、幼い時からキリスト教の家庭環境で育ちました。そして、姉の夫であるカナダ人の宣教師に西洋音楽の手ほどきをうけ、後に日本において西洋音楽の普及に努めました。

長谷川美代枝

個人消息　しょうそく

＊召天者

磯部衛一兄（享年８１歳）
２０１５年１２月３０日

広瀬サト姉（享年８４歳）
２０１６年　１月３０日

＊受洗者

岸田えい子姉　２０１５年１２月２０日
片山美枝子姉　２０１６年　３月２７日

おしらせ

＊一日研修会

主　催：教団日語部女性部
責　任：ピネイロス教会婦人部
会　場：ピネイロス教会
ご用者：阿部ダニエル師（教団部長）
テーマ：「主にある和合と一致」
詩篇１３３篇１節
日　時：５月２６日（木曜祝日）
受付は朝８時３０分からで、
午後３時３０分ごろ終了予定

・一日研修会のお申込みは、５月１５日（日曜）までに、担当の長谷川執事までお願いいたします。

編集後記・熊本地震によせて～

熊本県で４月１４日の前震を含め、マグニチュード７を超える大きな地震が発生し、その後も余震が相次ぐなど、甚大かつ深刻な被害が出ています。当教会のご出身者をはじめ、友人知人がいらっしゃる方々におかれましては、さぞ心を痛めておられることでしょう。

私たちは一日も早い復興を祈るとともに、クリスチャンとして、この事態をどのように受け止めれば良いのでしょうか？　美香師にうかがいます。

まず、今回の震災で心身共に痛みを覚えておられる方々のために祈らせていただきましょう。そして、このような状況を通して神様は何を私たちに示してくださっておられるのかを考えてみます。

聖書にあるように「終わりのとき」は近づき、その始まりには多くのことが起こります。戦争や地震などの災害もその一つです。ですから、このような時も決して他所の出来事だと思わずに、身近なことと受け止め、クリスチャンとして、身を慎み絶えず目を覚ましていなければなりません。そして、どんな時でもうつむくことがなく、祈り続けましょう。

ペテロ第一５：８／エペソ６：１８

◇http://saudekyoukai.jimdo.com/　◇ Facebookで礼拝メッセージ動画がご覧になれます。